

私は幼い頃からの夢、航空工学者になるべく、生地満洲の旅順高校理科甲類に入った。然し、二年の夏、敗戦と共に日本の翼は奪われ、叶わぬ夢と消えてしまった。ソ連軍占領下の大連で、拙い露語通訳をしながら放心の日々を送っていた或る日、嘗って中学校の教科書で読んだ岩波文庫・内村鑑三の「デンマーク国の話」という題の一文に再会した、この文章が私に確固たる前途を与えてくれたのである。

1864年デンマークはプロシアとの戦いに敗れ、南部最良の地シュレスイッヒ、ホルシュタインの二州を割譲し、大陸には荒蕪たるユトランド半島を残すのみの憐れな国に転落し、人々は失意の底に突き落とされてしまった。

然し、すべてのデンマーク人が無気力であった訳ではなかった。戦場を駆け巡り勇敢に戦った当時36歳の若き工兵士官エンリコ・ダルガスは浩然として言った。「我らは外に失いしものを内において取り戻すを得べし。我らの生存中にユトランドの曠野を化して薔薇の花咲くところとなさん。」

人々はこれを夢想と嘲笑した。然し、ダルガスは単なる夢想家ではなかった。それを実現する技術をもった土木技術者であった。彼は断固として己の策を説き、実行し、植物学者に育てた長男フレデリックとの二代に互る艱難の末、ユトランドをして緑滴る希望の地に造り変えたのである。戦いによって失われし二州に尚余りある富を、戦いに依らず、土木技術者の叡知と努力によって克ち得たのである。

私は、土木こそ、我らが子孫に遺すべき国土の気候風土をも造り変え、さらには、人心をも奮い立たせる、偉大な経世の技術だと、畏敬の念をもって受け入れた。

私は土木家たらんと心に深く決した。

昭和22年春、引き揚げ入港した弘暁の佐世保湾から眺める日本の山河はこの上なく美しく、まさに国破れて山河ありを痛感した。然し、上陸し辿り着いた父祖の地、広島も呉も無惨なる焦土と化し、無気力と粗野と焦燥が混在する悲しい地となっていた。

私は広島高校理科二年に編入し、周囲の反対を押し切り、迷わず、この国土をして薔薇の花咲き誇る優雅の地たらしめんと使命感に燃えて、京大土木工学科に進み、建設省に職を奉じた。

以来約半世紀、私は常にダルガスを心の師と仰いで恥じない仕事をして来たと、密かに自負している。

私が彼を畏敬して止まないのは、その成果のみではない。土木の原点が、大地の摂理に従い、技術を駆使して、国土の環境をより高次なものに遷移させ、吾人と子孫をして、より優雅な生活を享受せしめる事にあると、教えてくれたことである。

時代は移り、今土木に寄せる世論は必ずしも好意的ではない。

然し、我々土木技術者が、世に流されず、世に阿ねず、土木の原点に立ち返り、高い理想と意志を持って事に当たれば、必ずや世人の支持は我々の下に帰って来ると、私は信じて疑わない。

主な経歴 昭和2年満州生まれ、旅順高校—広島高校—京大土木—建設省河川局—大野ダム—近畿地建企画室—河川計画課長—琵琶湖工事事務所長—河川局開発課—官房政策企画官—木曾川上流事務所長—近畿地建河川部長—企画部長—計画局技術調査官—中部地建局長で退官—(株)鴻池組専務退職 工博琵琶湖総合開発計画調査立案、OECD環境会議等国際会議参加、ICOLD環境国際委員9年等